

在日外国人とメディア ～ブラジル人架橋アクターの語りとメディアのあり方～

白水 繁彦^{*}

Foreign Residents and the Media in Japan ~ From the Brazilian Bridging Actors' Point of View ~

Shigehiko SHIRAMIZU

本稿は在日外国人の生活とメディアのあり方にかんする研究の一環として行われた事例研究調査をもとにしている。今回の研究の対象は在日ブラジル人のなかの活動家つまり多文化架橋アクターである。研究目的は、かれらの語りから、在日外国人をめぐるメディアのあり方を考察することである。調査研究の結果、かれらはイベントの告知などの際メディアを利用し、恩恵も得ているが、いっぽうで迷惑や被害も受けていること、エスニック・メディアの側は専門的な教育を受けた日本語能力の高いレポーターを配すべきこと、法律・条例など重要情報はニューカマーにもわかりやすく、効率的に伝える必要があること、そのためにはエスニック・メディアの連合体を組織する必要があることなどが明らかとなった。

キーワード：エスニック・メディア、在日外国人、在日ブラジル人、多文化架橋アクター

Keyword: ethnic media, foreign residents of Japan, Brazilians in Japan, intercultural bridging actor,

1. 本稿の目的とその背景

本稿の目的は、在日ブラジル人架橋アクターによるメディアとの接触・交渉の体験の語りをとおして、多文化架橋アクターの役割や外国人向けメディアのあり方を考察することである。ここでいう多文化架橋アクターとは、外国人とマジョリティ（日本人）、外国人と外国人等の間で仲介、調停の役割を担う個人である。外国人に対する公的私的な援助機関に属することが多い¹。あり方とは、本稿では、現状・現在のかたちを意味するとともに「できればこうあり

たい」という願望をこめたかたちや期待という意味で用いている。すなわち、日系ブラジル人コミュニティのなかで集団間の仲介的・調停的役割をになう活動家たちは、日ごろメディアの送り手や受け手とどのような関わりあいを持っているか。そして、その接触・交渉はどのようなことになるのか。さらに、送り手との接触・交渉から生じる「結果」や「問題」に対し、かれらはどのような印象・感想を持ち、実際にどう反応しているのか。在日ブラジル人架橋アクター（本人が在日ブラジル人もしくはブラジル在住経験者である多文化架橋アクター）のメディ

^{*} 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授

付記：本稿は文部科学省科費費〔平成22年-24年基盤研究（B）（海外学術調査）「移民のメディア生産とメディア利用に関する国際比較-在外ブラジル人と在日日系人」（研究代表者アンジェロ・イシ武蔵大学教授）〕の助成による研究の一部である。

¹ 架橋アクターという概念は、エスニック・メディア研究における「架橋エージェント」からのアナロジーである（白水 2011:254）。

アをめぐる体験ならびに、メディアに対するかれらの胸の内を詳細に聴くことにより、多文化的状況下でのメディア一般ならびに同胞を受け手とするエスニック・メディアのあり方や、かれら自身の役割について考えてみたい。

以下、こうした目的設定の背景をなす在日外国人や在日ブラジル人コミュニティの現状を概観する。

1980年代後半、いわゆるバブル経済の華やかなころから、多様な外国人が来日するようになった。初期的にはパキスタンやイラン、ベンガラデシュといった南アジアおよびその近隣諸国から、その後はタイ、フィリピン、韓国、中国など東アジアや東南アジア出身の人びとやブラジルに代表される南アメリカ出身の人びとが続いた。かれらは総じて「ニューカマー」（新来外国人）と呼ばれることが多い。かれらのなかには来日の目的を果たしたり、夢破れたりして帰国する者も少なくない。いっぽう、第二次世界大戦前からさまざまな事情で日本に移り住んだ人びと、およびその子孫がいる。かれらは「オールドタイマー」もしくは「オールドカマー」（旧来外国人）と呼ばれることがある。したがって、例えば中国系の人びとや韓国・朝鮮系の人びと（コリアン）はニューカマー中国人やニューカマーコリアンと、オールドタイマー中国人やオールドタイマーコリアンに分けることができる。ともあれ、日本にはいま、ニューカマー、オールドタイマー合わせて206万人あまりが住んでいる（法務省統計在留外国人2013年12月末）。このうち最大の集団は中国系で約65万人、ついで韓国・朝鮮系の約52万人、第3位はフィリピン系の約20万人、第4位はブラジル系の約18万人となっている（表1参照）。

こうした「在日外国人」の多くが日本経済の激動のなかで日々を過ごしたが、なかでも波乱万丈といっても過言ではない生活を強いられた人びとが相対的に多いのがブラジル人である。

表1

国籍・地域別在留外国人（上位10）

国籍・地域	人数
総数	2,066,445
中国	648,980
韓国・朝鮮	519,737
フィリピン	209,137
ブラジル	181,268
ベトナム	72,238
米国	49,979
ペルー	48,580
タイ	41,204
台湾	33,322
ネパール	31,961

法務省在留外国人統計2013年12月末

その一端は人数の増減にも表れている。1990年の入管法改定の1年前（1989年）には1万5000人足らずだったのが、4年後の1993年には10倍の15万5000人になった。まさに急増である。その後さらに増え続け、2007年にピークを迎え、30万人を超えるまでになった。それが2008年、いわゆるリーマン・ショック以降減り続け、最近の統計（2013年）では18万人になっている。したがって、10年足らずで10万人以上も減少したことになる。法務省が統計の取り方を変更したので（登録外国人統計から在留外国人統計へ）多少割り引いて考えなければならないとしても、急激といってもよい減り方である。

日系ブラジル人は、1990年の入管法の改定により、他の外国人と比べ身分上の「優遇措置」が取られたこともあり、在日外国人労働者のなかでは相対的に高額な収入を得ていたといわれる。だから90年以降人数が急増したのである。しかし、そのほとんどが、派遣会社を通じた間接雇用で働いており、景気次第で雇用が増減される、いわば調節弁のような扱いであった。じ

っさい、日本の景気が悪くなると途端にかれらの仕事が減りだした。とくに2008年9月のいわゆるリーマン・ショック以降、かれらの職場で頻繁に実施された「派遣切り」等のために一気に生活が厳しくなり、日本政府等による帰国奨励策もあって帰国者が相次いだのである。ブラジル人は日本政府の政策によってとりわけ大きな生活変動を余儀なくされているとあってよい。このような事情も、われわれがその生活変動の実態（別稿）と並んでブラジル人のメディア利用に注目する大きな理由のひとつである。

ところで、一般に、移動してきた本人、すなわち移民第一世代（一世）は移動後一定期間、かれら特有の行動傾向を示す。そのひとつが、適応援助機関への依存である。「適応援助機関」とは、移動民の新天地への適応を手助けするさまざまな組織・施設・ビジネス等の社会的装置である。たとえば母語学校、母語新聞等のメディア、教会などの教団、同郷会などの互助的親睦団体、公的・私的な金融組織、そしてエスニック・ビジネスと総称される同胞相手の美容院や雑貨店、食料品店、レンタルビデオ店など様々なものが存在するが、エスニック集団の規模が大きいほど多様化・多様化するのが一般的である。

日本における「外国人」についても事情は同様である。先に移動してきた先輩同胞がさまざまな適応援助機関を立ち上げ、後続の同胞たちがそれを利用してきている²。筆者らは、適応援助機関のなかでも母語新聞などの、エスニック集団成員のためのメディア（エスニック・メ

ディア：後に詳述）に注目してきた。エスニック・メディア研究者のなかには、本人が日本へ移動してきた「当事者」がいる。たとえば、本研究で適宜通訳および解説の労をとってくれたアンジェロ・イシは、まさにその典型で、自身が日系ブラジル人三世（在日ブラジル人一世）の研究者であり、「デカセギ」ブラジル人を取材対象として滞日20年以上に及ぶ。したがって1990年以降急増するブラジル人をイミックな「内部者」の視線（当事者的視点）から観察し続け、それを多数のモノグラフにしてきた（イシ 2011;2009a;2009bなど）。この系列には中国人研究者である段躍中などがある（段 2003など）。前述のように本稿は激変を余儀なくされている在日ブラジル人に注目するので、日伯両文化、両語に通じる稀有な才能であるイシのおかげを多く被っている。

いっぽう筆者は1980年代初頭から海外日系人のメディア活動やその背景となる日系コミュニティを歴史社会学的、メディア社会学的に研究してきた。とくに注力してきたのは在北美・在南米、在ハワイの日系人のメディア活動を中心に、比較の意味で他エスニック集団のメディア活動についてもフィールドワークを行った。こうした移民のためのメディアは、現地では古くは移民新聞、外国人メディアと呼ばれたが、近年はエスニック・メディアと呼ばれることが多くなった。ところで、本稿でいう「エスニック・メディア」とは、エスニック・マイノリティの人が、その言語やエスニック・アイデンティティなどの必要から用いる、出版・放送・ウェブサイト等の情報媒体であり、とくに居住国内で編成・制作されるものである。

エスニック・マイノリティ、すなわち外国に出自をもつ人びとのなかには、こうした国内産のエスニック・メディアのほか、国内のマジョリティ向けの「主流メディア」、出自国で制作される「出自国産メディア」、世界各地の同

² ニューカマー外国人自身やオールドタイマー外国人が立ち上げる事業のほうに圧倒的に多いが、なんらかの形でかれらと関係する日本人が立ち上げる場合もある。エスニック・メディアの発行人は、1. 本人自身がニューカマーもしくはオールドタイマーの外国人であるケース、2. 外国人の配偶者を持つ日本人のケース、3. 発行人が国際交流団体を経営するなど、日ごろから外国人等との付き合いが多かった日本人のケースなどに分類可能である。

胞が制作する「ディアスポラ・メディア」、広く世界の人びとをターゲットとする「グローバル・メディア」などを用途に応じて使い分ける場合が少なくない。

筆者は、1980年代をとおして海外日系人のコミュニティを歩きながら、日本にも新しいタイプの外国人が増えている実情に照らし、日本でも早晚エスニック・メディアが叢生するのではないかと予想していた。はたして、日本でも1990年に入るとエスニック・メディアが急増する。「デカセギ」ブラジル人を追いかけて来日していたイシも、そのジャーナリストとしての経験を活かして在日ブラジル人のメディア活動を観察し記述しはじめていた。白水がイシら当事者の視点をもつ若手研究者と著したのが『エスニック・メディア』（白水 1996）である。それからおよそ20年、自ら短期滞在のつもりだったはずのニューカマー外国人が定住化し、各地でエスニック・コミュニティを形成するようになった。エスニック・メディアも当初の社会的役割である、移民の新天地への適応を援助するという役割だけでなく、新たな役割が生じているはずである³。

これまでのわれわれのエスニック・メディア研究は、その多くがメディアの発行者や編集者、レポーターといった送り手を対象とする「送り手調査」、もしくは紙面や番組といったコンテンツを調査する「内容分析」が多く、そのぶん「受け手研究」が手薄であった。そうした反省を踏まえて、今回は受け手研究の一環としてメディア利用者の経験・意見をとおして、メディアのあり方を考察したいと思う。メディア利用者のなかでも、主流社会（「日本人」がつくりだす社会。移民の受け入れ側という意味でホスト社会といういい方もある）と当該エスニック

集団とを繋ぐ役割・立場の人たち、すなわち架橋アクターをとくに取り上げる。かれらは、その立場や役割上、各種メディアの送り手たち（記者、レポーター、編集者など）と接することが少なくない。また、日本社会全体や地域社会、そして当該エスニック集団（同胞集団）の出来事にも敏感であるし、同胞集団にかかわる事件・事故等についても相対的に「事実」に近い立場にある。とりわけ在日ブラジル人は、前述のように、激動ともいえる人生を比較的短い間に経験している。メディアの送り手との接触にもそれが表れているはずである。この度は、そうしたかれらに集まってもらい、その接する各種メディアをどう捉えているか、どのような交渉を行っているか。どのような印象をもっているか等々について忌憚なく述べてもらう。そしてそのかれらの語りのなかから、主流メディアすなわち日本国内で制作される日本人向けメディア（当然のように日本語が用いられる）や、在日外国人によって利用されるエスニック・メディアのあり方について考えてみたい。

2. グループインタビュー

(1) グループインタビュー参加者およびその人選

グループインタビュー参加者人選の基準は、第1に、本稿が在日外国人のなかでも在日ブラジル人を対象とするので、参加者はブラジル生まれ、もしくはブラジルで長く暮らした人であること。第2に、架橋アクターとしての役割を担っていること。すなわち在日ブラジル人もしくは在日外国人と「日本人社会」（ホスト社会）の間を繋ぐ役割を専門的に遂行していること。第3に、架橋アクターのなかでも特に顕著な働きをしていること。以上3点をもとにアンジェロ・イシに人選を依頼した。イシはその研究上、そしてジャーナリストとしての職業上からも日

³ なお、筆者による日本国内・国外のエスニック・メディアについての研究の集大成が『エスニック・メディア研究』（白水 2004）である。

本全国のブラジル人コミュニティの実情に精通している。かれが選んだ人びとのうち、たまたま海外旅行中であつたり、先約のため都合がつかなかった数人を除いて、以下の5人の参加を得ることができた（配列は姓の五十音順。敬称略）。この5人に加え、リソースパーソンと通訳を兼ねてイシが参加した。

〈ヴィルジニア・ユミ・オオシマ（大島）〉（敬称略、以下同様）。犬山市役所の多文化共生推進員として外国人相談窓口などを担当⁴。ブラジル生まれの日系三世。1991年20歳の時出稼ぎのため来日。以後多文化共生の研修などを経て現職。

〈リサ・キクヤマ（喜久山）〉 HICEと略称される浜松国際交流協会の多文化共生コーディネーター⁵。日本生まれのブラジル育ち。小学校6年生のときに一時帰国（2ヶ月ぐらい）。南米専門の旅行会社や市役所、ブラジル人の教育支援などを経て2008年に現職。

〈エジウソン・キンジョウ（金城）〉 肩書きはNPO法人ブラジル友の会理事（代表理事は妻のアリーナ・キンジョウ）⁶。ブラジル生まれ

の日系二世。1998年2月に出稼ぎのため来日。子どもの教育を契機として多文化共生の事業の道へ。

〈高野祥子〉 NPO法人大泉国際教育技術普及センター⁷の代表、有限会社日伯センター代表。1945年中国天津で生まれ翌年日本へ。仙台で育つ。1958年13歳の時、親とともにブラジルへ移住。1989年、家族（夫、子ども3人）とともに出稼ぎのため日本へ「帰国」。周囲の出稼ぎ労働者の窮状を見かねて多文化共生の事業の道へ。

〈ロメオ・ケンイチ・フナツマル（船津丸）〉 愛知県一宮市のNPO法人交流ネット理事長⁸。日本では船津丸謙一、ブラジルではロメオと呼

を進めるとともに、地域の人たちとの相互理解を促進し、社会全体の利益の増進に貢献することを目的とする」とある。<http://www.weblio.jp/content/%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E5%8F%8B%E3%81%AE%E4%BC%9A>（2013年11月15日更新）（2013年12月30日閲覧）

⁷ 大泉国際教育技術普及センターは、本部を群馬県邑楽郡大泉町に置くNPO。法人認証は2001年7月2日。活動の趣旨・目的に「市民参加、相互扶助の精神のもと、すべての日本人および日本で生活をする外国人に対し、各種語学の指導、社会教育その他教養を得る機会の提供、産業技術を習得する機会の提供、文化の指導・交流、生活上必要な助言・情報提供・相談などを行うことを通じて子供の健全育成、外国人の地域社会への参加を図り、外国人と日本人の真の共生を促進し、国際交流に寄与すること」を掲げている。文部科学省 特定非営利活動法人大泉国際教育技術普及センター（2013年12月30日閲覧） http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/npn/npovol4/1316926.htm

⁸ 交流ネットは、本部を愛知県一宮市に置くNPO。法人認証は2004年7月30日。その活動紹介としてサイトには「NPO交流ネットは、日系ブラジル人のために各地域で社会保険や雇用保険などの身近なおかつ重要な話題の説明会を開いたり、ポルトガル語のサイトを通して、日本で生活する上で必要とされるニュース・イベントや娯楽・行政のあらゆる情報を発信しています。また、日本の法律・制度等に関するセミナーの開催の他に、生活・教育・文化・就業等に対する支援活動も行っていく方針であります」としている。交流ネット（2013年12月30日閲覧）

<http://www.koryunet.org/>

⁴ ヴィルジニアさんは多文化ソーシャルワーカーとしても活動している。その様子については多くのサイトが紹介しているが、たとえば下記のサイトを参照。愛知県 多文化ソーシャルワーカー活動レポート No.1（2013年12月30日閲覧） <http://www.pref.aichi.jp/0000043150.html>

⁵ リサさんが所属しているのは静岡県浜松市に本部を置く公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）。その事業内容の概略は「浜松市における市民レベルでの国際交流及び多文化共生の推進母体として情報提供、相談業務、文化紹介などの各種講座研修やイベントなど、国際交流の推進と地域の共生社会づくりを目指しています。様々な機関とも協力して活動します」とある。HICEのサイト（2013年12月30日閲覧） <http://www.hi-hice.jp/aboutus/business.html>

⁶ ブラジル友の会は、本部を岐阜県美濃加茂市に置くNPO。法人認証は2007年6月6日。定款には「この法人は、在住外国人、主に日系ブラジル人で支援を必要とする人に対して、生活向上、教育、福祉、医療の支援などの活動を行い、これらの人々の自立支援

ばれる。ブラジル（サンパウロ）生まれ。父は日本企業の駐在員、母はブラジル生まれの日系二世。ブラジルの大学を中途退学し1992年出稼ぎのため来日。その後、本人の資質の高さが認められ工場現場から転身、管理の道へ。

(2) メディアとの接触

ブラジル人は新聞を読まないという言説

白水：在日ブラジル人や在日外国人と日本社会を繋ぐ役割をもつ架橋アクターであるみなさんに、自分たちとメディアとの関係について語っていただきたいと思います。日本のメディアといえば、例えば朝日、毎日といった日本語の各新聞、もちろん全国版もあるし、地方版もある。NHK、TBSなどのテレビやラジオといった放送もある。それから、ポルトガル語の各種メディアもあります。そうしたさまざまなメディアをどう利用しているか。各種メディアとどのような関係をもっているか。自分が今まで関わったことのある事例でこういうことがあって大変助けになったとか、逆に、大変困ったとかということがあれば、教えてください。

ロメオ：もう2、3年前になりますが、ブラジル本国のある大手新聞『オ・エスタード・デ・サンパウロ』から取材を受けた時の話です。「今の日本の労働市場、雇用のことを教えてください」という質問でした。私は「日本で労働者として働くならこれくらいの知識は必要だよ」という意図をもって話した。正社員、パート、アルバイト、それぞれの違いとか、契約方式とか、雇用期間とかにもふれた。ところが、実際に紙面に載った記事には違うことが書いてある。私は、派遣会社での雇用契約は、企業によっては3カ月・6カ月という更新もあるけど、ほとんどが2カ月なんだといったはずだった。

しかし、彼が書いた記事には日本での派遣会社での雇用契約はみんな6カ月だとなっている。「私はそんなこといってないでしょ？それ、ちゃんと修正しないとイケないんじゃないの？」といったら、その記者がいうには「いやいや、ブラジルで誰も読まないから、新聞は」と。

「いや、読む・読まないの問題ではなく、私が間違った情報を皆さんに伝えてるように見えるじゃないですか」といったんですが、彼は取り合わない。信じられないような話です。

ところが、ブラジルでその記事を読んだ家族や親戚は喜んだ。「日本で、ロメオも有名人になったね」とか「新聞に載ってたよ」とか「すごいことをいろいろあなたは知ってるね」とかいつてくれた。しかし、自分としては間違った情報を伝えた（張本人だ）と思われるのは納得できないし、堪らない気持ちになる。

〈考察〉

在日ブラジル人は出出国ブラジルのメディアを受け手として利用するだけでなく、メディア（送り手）から取材される、つまり利用される場合もあることがわかる。さらに送り手のなかには不適切な取材方法・過程を経てレポートする可能性があること、また、ブラジル人は送り手・受け手ともにメディア、とくに新聞に対して特有のイメージを持っているということが窺い知れる言説である。

在日ブラジル人初の街頭デモ

白水：日本のメディアで何か良かったこととか困ったことは？

ロメオ：ブラジル人やペルー人のみんなと名古屋でデモ行進を行ったとき（2009年2月1日）は非常にたくさんのメディアが来てくれた。

17社ぐらいかな。やはり、初めてああいうふうには、1,500人のブラジル人が行進をやったので、たくさんのメディアが来てくれたんだと思う。新聞だけじゃなく、日本やイタリアなど世界の通信社も来ていた。ブラジル人がそういうことを起こしたら、やっぱり全世界が注目するんだと思った。これだけのブラジル人が集まって、自分の人権というか最低限の権利を訴えているんだよね、日本、あの先進国日本で。本当は日本の労働者はこんな状況に置かれているんだと。だから、全世界のメディアがやっぱり注目してくれる。うれしかったです。やっぱりちゃんとしたメッセージを出すと、皆さんは集まってくれる⁹。

白水：ヴィルジニアさん、メディアとの関係について、ご経験を話してくださいますか？

ヴィルジニア：ブラジルメディア（在日ブラジル人向けエスニック・メディア）は私たちがイベントをやるときに、無料で載せてくれるので、助かります。メディアが知らせてくれるおかげで、たくさんの方がイベントへ申し込んでくれることがあるんです。

アンジェロ：ヴィルジニアさんにはぜひ聞こうと思っていたのが、エルクラノが殺された事件。1997年10月、小牧市の日系ブラジル人少年のリンチ殺人事件という有名な事件があったんですけど、ヴィルジニアさんは、そのときにもいろいろ通訳もしたし、日本のメディアと、あとはブラジル系のエスニック・メディアの取材もいっぱい受けたわけですよ。そのときのことを教えてください。メディアはど

ういうふうな事件の取材をして、それがどういうふうな記事とかテレビのニュースになるか。そうした点でなにか感想はないですか？

ヴィルジニア：私が当時のことをいえるのはブラジルメディアについてだけ。そのころは日本語が読めなかったんです。

アンジェロ：ああ、そう。じゃあ日本語のマスメディアでどう報じられたかは、あまりチェックできてない？

ヴィルジニア：あまりチェックできてない。テレビとかでは何度か聞きましたけど。ただ、エルクラノ事件について本を書いた西野留美子さんは、本当にドメンタリーのように正しく知りたいといったた（西野 1999）。

いっぽう、マスメディアはだいたいにおいてセンセーショナルに報じ、外国人が悪いとかいっていたメディアもあった。あのときは日本のメディアもブラジル人と同様、センセーショナルみたいになってたかもしれないですね。

ブラジル人メディアは、詳しく取り上げるときもあったけど、ときおり、深くない記事もあった。被害者意識が生じて、じゃあ復讐しようという話もちよっとあったし、逆に、エルクラノのお父さんが子どもたちをほったらかしてたから、そんなことになったんじゃないかなという意見もあったみたい。そして、殺されたのはブラジル人のギャングの子どもだ、というような噂もあった。結構いろいろな情報が飛び交ったようですが、私は、そのころ日本語が読めなかったので（日本のメディアの伝えた内容については）詳しくはわかりません。

白水：誤解を招くような書き方もあったかもしれないですね。

ヴィルジニア：そうですね。それはたくさんあったと思う。いずれにせよ、この事件がブラジル人だけでなく、日本人にとってもショッ

⁹ このときのデモについての新聞報道の一部は以下のとおりである。「派遣切り」などで仕事を奪われた日系ブラジル人やペルー人が2月1日、名古屋市中区栄で集会を開きました。東海四県から、家族連れなど約千五百人が参加し、雇用と住居、教育の機会拡大を訴えました。NPO法人や日系外国人支援団体で構成される「SOSコミュニティ」の主催 「しんぶん赤旗」（2013年12月1日閲覧） http://www.jcp.or.jp/akahata/aik07/2009-02-02/2009020203_02_0.html

クだったらしく、あるテレビの「今年の10大ニュース」という番組にエルクラノの事件が入っていた。

白水：高野さんはメディアとの関係でいろいろと経験がおありでしょうね。

高野：テレビも新聞もものすごく影響があるんですけども、面白いのは記者によって全く取り上げ方が違ってくるということ。熱心に取材して出来るだけ正確に記事にしようと頑張る記者もいる。もちろんその逆の人もいる。ある通信社の記者Hさんは素晴らしい方で、私どもが「地球市民賞」をいただいたときには、わざわざ東京まで来て取材された。そのかたが書いたニュースがその通信社始まって以来の買い取りがあったということです。九州の地方紙とか、もういろんな地方紙から買い取りがあったということで、編集長賞を受賞されたはずです。

アンジェロ：そう。彼は本当、数少ない、ちゃんと当事者のことをきちんと考えてくれる、そういう記者です。

高野：それともうひとつ、あるテレビ局。群馬支局では、ブラジル人を題材にしてドキュメンタリーを作成すれば視聴率が上がるといわれていました。その中で私たちの活動がいろいろとテレビで取り上げられたという事もある。

白水：なるほど。どうしてブラジル人の状況を伝えると視聴率が上がって出世していくんでしょうね。

高野：全然私もわからないですけど、大泉がもしろい町というのはあるかもしれない。小さい町に外国人が集中している。シチュエーションがいいというんですか、いい映像が出来るというのか。ほかの町では撮れないものが撮れるというのかな。

メディアの問題というと、こちらが出した情報が正しく書かれてないという時に生じる

こともある。外国人問題は微妙な問題だから、記者が取材にいらしたときに私たちは言葉一つひとつ、もうすごく気をつけてお話ししたのですが、全然別のことを書かれてしまったことがある。それで大変だったんです。町づくりにこれだけ外国人が貢献しているんだ、ということをお話したはずなのに、まるで「自分たちだけがやってるんだ」といったようなことになっちゃったんです。

白水：なるほど。そういった意味では、ちょっと手柄話、自慢話に聞こえちゃいますよね。

高野：そうなんです。ある記者のかたはそういうことが多い。話を作りかえる傾向があるみたいです。それでその記者にはクレームも多いと聞いています。

私たちの活動は、日本の新聞にはよく取り上げられてはきたんですけど、なかなかブラジルメディアには取り上げられなかったんですが、あるかたが来られてから変わった。その方は『インターナショナル・プレス (IPC)』の記者で、やはり日本語が読めて、日本語を深く理解できる人でした。「(日本語の)新聞に出ているこの人(高野さん)の活動をIPCでも紹介しよう」ということで、取材に来られた。そちらに取り上げていただけるようになって、初めてブラジル人が「高野さんって、こういうことしてるんだ」とやっとわかってもらえるようになったの。私たちの活動が(日本の)ブラジル語メディアに取り上げられるようになったのは私たちが活動を始めてからかなりたった後。この記者がいなかったら取り上げられなかったんじゃないかな。やっぱり、日本語を理解できる女性記者がいたということ。

アンジェロ：そうそう。そういうのはあります。やっぱりブラジル系のエスニック・メディアのジャーナリストたちは日本語が読み書きできない人が多いから…。日本社会でいろいろ、

日本語を中心に活躍していても全く評価されないですね、日本のブラジル系のエスニック・メディアには。たとえば僕は、いっぱいいろいろ在日ブラジル人について日本語で論文を出してきてます。その論文を読んでもくれた記者って少ないんじゃないかな。漢字が読めないというか日本語が読めない人が多いから。

高野：先ほど話した女性記者は例外的に素晴らしく記者魂をお持ちの方でした。もういろいろなイベントでも何でも（日程を）携帯に入れて、毎度走り回って。彼女の車の中を見ると、ドリンク剤とモスバーガーの袋がいっぱい入ってるんです。「何これ？」と聞いたら、それ飲みながら、食べながら走って取材する。「こんなことじゃ、体こわすでしょ？ダメよ」と言って間もなくです、くも膜下出血。まだ30代で。いまブラジルに戻っていますが、すばらしい人だった。

(3) 記者、レポーターの資質

白水：私が1990年代前半に『インターナショナル・プレス』などのポルトガル語のメディアをインタビューしはじめたころ、つまりそうしたエスニック・メディアの初期は、それまで工場労働をしていた人が、あるときポンと記者になったりした。しかし、その後10年、15年が経過した時点で、近頃はちゃんとジャーナリズム教育を受けた人を採用していると経営者は述べていたが実際のところはどうでしょう。

アンジェロ：まあ、いろいろです。

白水：実際、編集長クラスはプロのジャーナリストだったはずですが。それが、リーマン・ショックを経て読者は減るし、広告も思うように入らない。最も肝心の求人広告が激減した。そういうわけで経営が厳しくなってポルトガル語の有力な新聞は軒並み撤退した。

〈考察〉

日本でポルトガル語新聞が休刊（実質的には廃刊）になった理由や背景については、アンジェロ・イシは独特の見解を持っている。つまりリーマンショック等がポルトガル語の有力な新聞の撤退を促したというよりは、むしろこれがIPCやTudo Bemの経営者によって絶好の「名誉ある撤退」のアリバイとして利用されたと考えているのである（詳しくは、イシ 2012を参照）。

白水：社会の健康な発展には市民が信頼できるメディアの存在は必要不可欠だといわれるのですが、では、在日ブラジル人コミュニティはどのようなところから公的情報を得ているのでしょうか。

ヴァルジニア：私たちの地域は、今すぐく、『ポルトガル・ミエ』（*PORTAL MIE*）とかのウェブメディアというかサイトのメディアがさかんです¹⁰。

ウェブメディアでは普通の一般の、本当に私たちの知合いが（送り手として）たくさんいるんです。主にカメラマンですけど。いろいろなイベントなどに出かけ、写真を撮ったりして取材している。けど、いわゆる記者ではないです。

白水：レポートをしている方には給与などの報酬はあるんですか。

ヴァルジニア：あります。賃金はちゃんとそのサイトの会社が払う。ウェブメディアの会社をやっている人のなかには、最初からメディア関係をやりたいというわけじゃなくて、まずは写真中心のウェブメディアをやり出したら、これが当たってそっちに行った人いるのではないのでしょうか。だから少なくとも日本のブラジル系ウェブメディアの経営者もメディアの経験があるというわけではないんで

¹⁰ *PORTAL MIE* 『ポルトガル・ミエ』のサイト <http://portalmie.com/eventos/>

す。たまたまこれが当たったから、じゃあこれにもっとエネルギーを注ごうと。「じゃあ、パウラさん、取材やってください。エドアルドさん、ここへ行ってください」という具合に頼んで行ってもらう。頼まれたほうはアルバイト感覚で取材に出かける。よく広告みたいな募集が出てるじゃないですか。「フリーランスで地域の取材しませんか」と。アルバイトの募集のようなものです。だから、誰でもいいんです。その募集に応募して「はい、私、小牧でやります」というと、「はい、じゃあ行ってください」というような感じです。

ロメオ：そういえば、我々のNPOが東北の被災地のほうにボランティアで炊き出しに行った時も「アルバイト」のレポーターが来ていた。私は「メディアに取り上げられるために我々は行くんじゃない。我々はブラジル人として、ボランティアとして行くんだ」といったら、その若者が私の所に来て、「すみません、私、取材を頼まれたんだけど、やっぱり写真レポートやめます」といって帰って行った。アルバイトでプラスアルファを稼ごうとしたのですね。

白水：ただ、それは非常に難しい問題ではありますよね。あなたがたはせっかくいいことをやってるんだから、みんなに知らせてあげてもいい話ではある。けれども、NPOの宣伝のためにやってるわけではないというのがね。その兼ね合いは難しいですよ。

ロメオ：結局、中日新聞の人が来てくれましたけどね。私たちは伝えたわけではないのに。そのボランティアの隊に元プロサッカー選手のラモスさんもいたんですが、彼もメディアに行くと言ったわけではない、という。

アンジェロ：じゃあ、ラモスのマネージャーが、きっと流したんじゃない？

ロメオ：いや、それはわかんないけど、誰かがその情報を流しちゃって、来たんだよね。

〈考察〉

日本の記者の行動傾向についてもポジティブ、ネガティブ、両方の見解が述べられている。出来る限り追跡を重ね、十分なデータを得たところで報道するレポーターに対しては評価が高いが、一方的な見地の上に浅い取材でレポートがなされていると判断されると非常に厳しい評価が下されることがわかる。要するに「取材される側」の憤懣は長期間にわたって続くと思われる。外国人レポーターのなかには日本語能力が十分ではないといわれる人がいる。だから日本語能力が高く、ジャーナリストとしての志も高いエスニック・メディアのレポーターは相対的に目立つ存在となるようだ。

エルクラノ少年が殺害された事件に関する架橋アクターの言説からは「調査報道」の重要さが見てとれる。取材を重ねて得られた重厚なデータをもとに公平な視点から展開されるレポートを調査報道と呼ぶなら、時間も人材も少ないなかで日々格闘する小メディア、なかでもエスニック・メディアには難しい課題である。その点、単行本にするために時間をかけて準備されるレポートのなかには見るべきものが多いのも理解できる。しかし、日刊や週刊ではない、比較的取材時間の取れるメディアの場合には不可能ではないだろう。実際のところ、たとえばハワイの日系メディア*Hawaii Herald*の特集記事は、その多くが典型的な調査報道スタイルによって書かれている（白水 2004:279-303）。*Hawaii Herald*の場合、レポーターたちは大学でジャーナリズムを専攻し英語を母語とし、英語を話す人に取材し、英語を読むことができる読者相手に表現するという条件下にある。いっぽう、日本のエスニック・メディアのレポーターのなかには、ジャーナリズム・レポートの専門教育を受けておらず、しかも言語的にも2言語を理解する必要があるという過酷な状況下で働かざるを得ないというハンディを背負

っていることがわかる。

なお、あまりに生々しいエピソードなのでここには載録できなかったが、このグループインタビューの参加者の多くが言及したのが「メディア被害」ともいべき現実である。自分が話したことと逆のことが書かれたり、ストーリーを省略しすぎて書かれたために読者に誤解され、自分が悪者扱いされたという経験をもつ人は少なくない。これはブラジル系のエスニック・メディアでも、日本語の主流メディアでも経験することであるという。そのために職場に居づらくなり「そこから、ちょっと私、マスコミがトラウマになった時期もあるのです」という感想を述べた人もいた。

利害が激しく対立する集団間にあっては、当該各集団が自らの利益誘導のためにメディアを利用し自説の喧伝に努めることも少なくない。したがって、さまざまな情報が乱れ飛ぶことになる。日本のエスニック・コミュニティをめぐる状況も基本的には同様の構造を持つと考えてよい。そうしたなかで意見を求められる架橋アクターたちは、細心の注意をはらって発言したとしても、片方もしくは両方の集団から手ひどいバッシングを受けることがある。今回のグループインタビューでもそうした実態が縷々語られた。かれらは日々、想像を絶するストレスに曝されるといっても過言ではないだろう。

(4) ウェブメディアの台頭

ヴァージニア：ブラジル人はディスコに行ってウェブメディアに載っている写真を見る。自分や友達が写っていれば喜ぶ。確かにあるウェブメディアは月曜日とかの朝は、たくさんの人がアクセスする。みんながアイドルみたいになって自分の写真や友達の写真を探す。それはすごくいいビジネスで、ニッチ市場というのかな、ウェブメディアはニッチを見つけたと思うんです。それはブラジル人の弱

さを見つけて、それですごくいい商売にしてる。つまり、ブラジル人は雑誌メディアなどを読まない。たとえば『アウテルナチーバ』(*alternativa*) など¹¹、とてもいい雑誌があって熱いファンが付いているけど、やはり読者は限られているといわれています。だから、まともなメディアは経営が難しい。私たちが真面目なことをいっても、残念ながら取り上げてもらえるチャンスがない。これはブラジル人の問題。活字をあまり読まないんです。もっとも、どんどん真面目なメディアがなくなっていくのはブラジル人だけの問題ではなく、世界中そうかもしれない。メディアといえども商売だからね、と誰かがいっていたけど、妙になっとくしたんです。

アンジェロ：かつて、あるウェブメディアの編集長といろいろ話をしたことがあるんだけど、やっぱり彼らも本当にもうちゃんと意識的に、それ（ブラジル人の好きなこと）がわかかっていて、そのように作ってます。彼は、はっきりと「いや、僕は真面目な重苦しい社会問題とかは載せないことにしてるんだ」と。それで、やっぱりみんなが見たがる、読みたがるネタを積極的に出しています。本格的な記者は雇っていないし、ほとんどがカメラレポーター、それも多くがアルバイト。かれらが写真や動画とキャプション的な文章を送ってくる。『ポルタル・ミエ』はウェブメディアでは一番の勝ち組です、今の時点では。高野：大泉には『ポルタル・ミエ』の記者というかカメラマンがいたんですが、帰国してしまった。去年（2012年）の末まではいたんですけど、「オリンピックとワールドカップが

¹¹ *alternativa* 『アウテルナチーバ』在日ブラジル人向け印刷メディアの代表的存在。無料。月2回刊。毎月5万部前後を発行している。なお在日エスニック・メディアのなかでは唯一といってよい日本ABC協会の部数公査を受けている。オンライン版のサイト <http://www.alternativa.co.jp/>

あるから（それで稼いで）、子ども、これで食べさせるんだ」ってブラジルに帰ってしまった。

そうなると、大泉の出来事などが『ポルタル・ミエ』に出なくなるんです。レポーターがいたときは彼を学校のイベントとかに招待しないと父兄のほうから苦情の電話が来るほどだった。「なぜレポーターを呼ばないの？」と。サイトに「この間のイベントが出ていない」とか、「うちの子どもたちが出ていない」とか、たいへんなんです。

白水：なるほど。記者の不在というのも問題ですね。メディアが報じないと、事件・事故やイベントも、当事者やたまたまそこに居合わせた人以外にはわからないから、そのこと自体「なかったこと」になってしまう。

ロメオ：ウェブメディアも経営は大変だと聞いています。レポーターには本当にもう交通費ぐらいしか出さないとか。写真の枚数とかは関係ない、という話も聞いたことがある。

ただし、レポーターにもメリットはある。パーティーとかは全部ただで入れるから（笑）。

ヴァージニア：とにかく若い子はすごくウェブメディアに頼っている。よくいえば写真や動画を見て理解する。

高野：それは（文章を）読まないでいいから。読むのが苦手なブラジル人もいますから。日本で生きて行くなら、何でも読まないで損する場所があるんですよ。読まないブラジル人（や外国人）は損してるんです。説明文でも何でも、読んで「ああ、こうなんだ」って理解しなければ。本当に驚かされる説明文ってあるじゃないですか、商品の。それ読まない人、読めない人は気の毒です。

(5) メディアのもつ問題点

白水：エジウソンさん、メディアとの関係とい

う点で経験があればお話しください。

エジウソン：（アンジェロによる通訳）：僕らの場合はもう設立当初から、ブラジル系のメディアにしても、あるいは日本系のメディアにしても、いろいろと恩恵を受けた。そういう経験が多かったですね。それに、やっぱり、メディア関係者が望む、あるいは好むテーマとか題材というのが、ある種傾向とかパターンがあるというふうに思います。ひとつは教育問題。たいへんに食いつきがいいテーマです。多文化共生も一般に食いつきがいい。あと、最近のことでは経済危機・雇用危機という題材です。

その経済危機・雇用危機は、これもまた二つの取り上げ方のパターンがあって、ポジティブなほうと、あとはちょっと問題なほう。ポジティブなほうというのは、いわゆる広報効果と云っていいのかな。つまり、支援物資が必要であるというふうに呼びかけをしたとき、メディアがそれを伝えてくれると、一気にすごい数の市民からの支援物資提供の申し入れが殺到して、もうこちらのほうでは対応し切れないぐらい、そういうケースもあった。

もうひとつ問題とかネガティブなほうの話は、あるメディアから「すごく生活が困窮している、ほんとうに困っている家族や人を紹介してほしい、そういう人を取り上げたいので。紹介してくれれば、お金を出します」と。答える側だけでなく、紹介する側にも謝礼を払うからと。そうなると、どのような記事になるかわからないから、我々はそういうオファーに対しては受けないことにした。

あと、自分がある意味で取材の被害をこうむったケースだと、名古屋で数年前に交通事故があって、これはブラジル人が起こしたんだけど、そのブラジル人が美濃加茂市在住の人だったので、それで日本のマスメディア、

特にテレビなどが一言コメントを撮らせてほしいと電話攻勢をかけてきた。それを断ったら、翌日早朝、予約無しで直接テレビカメラがライトをつけて、彼の自宅の前に来た。玄関のベルを鳴らして。そんなところを近所の人たちに見られたら「いったい何が起きているの？なんでこの人が今テレビの取材をされてるのか」ということでいろいろ憶測が飛び交いかねない。こういうことは自分としてはすごく本意に思う。自分には子どももいるし、面倒なことに巻き込まれたくない。だから、自分はコメントしたくないと説明するけど、その説明をしている姿だけでも周りの人から見れば「いったい何したんだろう」ということになる。

もうひとつ思い出すのは、これはもう12年前ぐらいかもしれないんですけど、岐阜県でブラジル人が警察官から拳銃を奪って逃亡したという事件があった。その時、娘は小学校の6年生だったんですけど、どうやら彼女のクラスで、先生がある新聞記事を生徒たちに見せて「こういう事件が起きたので気をつけましょう」と注意を促した。

この日、彼女が帰宅して、父親である私に投げかけた第一声というのが「お父さん、何が一番重要というか重大なんだろうか」と。つまり、ブラジル人であるということなのか、それとも、誰かが警察から拳銃を奪うという行為・行動のほうなんだろうかと訊いた。なぜならば、見せられた新聞記事では「ブラジル人」という文字が異常なまで大きく書かれていて、「警察から拳銃を盗む」という文字のほうは、むしろより小さな目立たない文字で書いてあったのだから。

彼女にとっては、そこでブラジル人に対するある種のイメージというものが悪い意味で植え付けられて、トラウマとしてその後残ったのではないかというふうに、自分は親とし

て心配しているわけです。

高野：先生、ちょっと思い出したんですけど、このあいだ、全国放送の記者が多文化共生を取り上げたいということで、大泉に取材に来た。他県のブラジル人集住地でも取材したらいいです。私たちも頼まれて、何人か紹介しました。パート1、パート2のうち、パート1のテーマは「日本社会に入って行けない日系人」。なんかちょっとすごい(ショッキングな)タイトルになったと感じました。ブラジル人の非正規雇用の若者を扱ったみたいです。たとえば、日本の学校に小さいときから行ってるけど(長続きしなくて)、若いうちから工場で働いてるようなケースということで、愛知などのブラジル人の集住地にあちこち、たぶん1か月くらい取材に行ってみたんです。

パート2のテーマは母語授業について。「失われていく文化—母語授業、言葉を話せなくなっている子どもたち—」というタイトルだった。母語、文化が失われていく、この指摘は間違っていないと思うんですが、パート1のほうの、「日本社会に入って行けない日系人」というのはちょっとどうかと思う。多分インパクトを与えるためにそのようなタイトルにしたのではと。でも、こういうタイトルで出すというのがちょっと悲しい気持ちになりますよね。出る人(出演する人)もかわいそうです。特に若い子。たしかに出演した若い子たちは本当のことをいってるけど、「日本社会に入って行けない」とタイトルがついてしまうと、また(地域の人たちに色眼鏡で見られて)それがコンプレックスになるんじゃないか。大人だったら、いくらでも議論することもできるけど、若い子だったら、多分、地域ですごく恥ずかしい思いをするんじゃないかと心配するわけです。

リサ：マスコミとの関係でいえば、私どもも新聞とかのマスコミをうまく利用してやってい

こうと努めている。しかし、マスコミで報じられることにはいろいろ問題もある。時にはどこまでが本当でどこからがそうでないかわからないこともある。

今は私、地域の外国人コミュニティ向けの事業の企画運営をしています。あとは、外国人の人たちの相談も受けてますが、私の場合はどっちかといいますと、コミュニティリーダーの人たちからのまとめ相談が多いです。あと、4人のブラジル人相談員やフィリピン人、中国人、ペルー人の相談員もいるんですけども、私はその相談業務の担当もしていますので、いろんな話がいろんな角度から入ってくる。すると、新聞などに出ていることと実際のことが違うということも少なくない。場合によってはもう本当に腹が立つこともある。しかし、今それはもう仕事として、あまりいえない。私の勤め先である国際交流協会は中間支援組織なので…。正直に言って、マスコミにも腹が立つことがある。しかし、ときにはマスコミがそのように報道するよう仕向ける人がいて結果的に事実とは異なる報道内容になることもある。その場合は、本当はそうした人の側に原因があるわけで。私も最初はマスコミの力というのは素晴らしいと単純に思っていました。でも、国際交流協会に入って、少し考えが変わった。実際にやったことや起こったことが報じられるというより、どのようなことがどのように記者に伝えられ、記者がそれをどう報じるかという問題なのだということがわかるようになった。

アンジェロ：そういう日本のメディアの、例えば市とか行政から来たプレスリリースを何も考えずにそのまま記事にすることがあるというのは、僕も問題だと思うし、同じように、ブラジル系のエスニック・メディアも、大使館とか領事館がリリースしてきたのを「はい、わかりました。そうですね」、とそのまま記

事にすることがある。僕は、これはジャーナリズムじゃないと思っているんです。

白水：要するに、日本のメディアは役所や企業の広報媒体だと揶揄されることがあるように、役所や企業などのメッセージをトコロテン式に伝えている部分がある。この点に関してはジャーナリズムといえない。

エスニック・メディアへの注文

アンジェロ：ぜひひと言皆さんに聞いたかったのが、日本にあるブラジル人向けメディア、つまりブラジル系のエスニック・メディアを良くするためには、どうすればいいかということです。こうすればいいのに、こうなればいいのにという、何かサジェスションとか提案とかアイデアはないですか。

リサ：実際に地域の外国人コミュニティで何かあったときは日本にいるエスニック・メディアが一番有効な情報発信だと思っているんです。ただ、問題は、ブラジル系のマスコミのレポーターたちのなかには日本語がわからないかたもいる。もしくは中途半端。間違えて書いてしまうこともある。

なので、もうちょっと日本語がわかる人が取材とかに行かないと、(報道内容や範囲が)すごく限られてしまう。しかも、多分、予算の関係だと思うけれど、人が足りないんです。なので、とくにイベントなどが多い週末の報道の優先順は、どっちかというワイワイ楽しいことで、さらに、ここでやってること(ごく限られた地域での出来事)のレポートになるので、結局、全国のブラジル人が読む情報にはあまり適さない。もしくは足りない。さらに、日本の事情をあまり知らないで「私たちは差別されている」というような感じで書いてるけれども、ちょっと不十分なところ、誤解したまま報じているところがあるんです。

記者クラブの問題もある。浜松市での情報は市の広報部という所が一斉に流すけれども、ただ、エスニック系のマスコミはそのクラブに入っていないので（公的情報の入手がむずかしくなる）。

アンジェロ：なるほど。東京でマスコミの研究者の間でよく話題になる不平等の問題。特に、記者クラブに入っていない（入れない）中小メディアや外国人ジャーナリストなどが問題にしていることですが、それがローカルレベルでも起こってるわけですね。

リサ：そう。『アウトテルナチーバ』とか、そういう大手のエスニック系のマスコミもクラブに入っていない。入っていないから情報を送ることができない。「でも、国際交流協会だったらそれができるよ」といわれることがあるけれど、しかし、普段からオーバーワークで、もうすごく負担が多いんです。そのうえ、エスニック・メディア向けに市の広報部の代替をするとすると、さらにオーバーワークが進む。

それでも、在日外国人向けメディアは限られているから特別扱いみたいな形で（ブリーフィングを）やってあげても、メディアによっては、日本語がわからないところが少なくない。だからといって、翻訳をしてあげるとなると、さらに忙しい。私たちのHICEニュース（月刊）も外部で翻訳してるんです。誰も余裕がないから。だから、もしブラジル系メディアがもっと日本語を話せる人、バイリンガルの人がレポーターだったら非常に助かる。ただ、バイリンガルになると、こんどはポルトガル語が弱いとかいろいろあるから難しいとは思いますが、日本語がもっとわかったら（お互い）助かるだろうと思います。また、取材文化の違いも大きい。ある外国語メディアのレポーターのなかには取材の直前に取材依頼、取材対象などの文書を送りつけ

てきて、対象者の都合でインタビューが出来ないと、「われわれを差別している」と騒ぐのがいた。日本ではとくに役所などは何週間も前から依頼文書を出しておくというのが常識だと思いますが、そうしたことがわからない人が少なくない。

外国人向けメディアの連合体の必要

ロメオ：エスニック・メディアの問題といえば、ブラジル人向けにしる、他のエスニック・メディアにしる、外国人向けメディアは連帯しないから問題なんですよ。例えば、連帯して運営する団体をつくる。その団体の運営は難しいとは思いますが。官公庁の流す情報を集約して訳して、エスニック・メディアに流す。そういう中間の団体が必要なんだけど、それを運営するには費用がかかり過ぎますかね。

白水：そうですね。とても大事な指摘ですね。わたしも、エスニック・メディアの連帯をはかる組織はあってしかるべきだと思います。実際、日本でも1990年代初めエスニックメディア・プレスセンター（EMPC）が組織され活発に活動していたこともあります。ただし、この組織は加入メディアが7社程度と、網羅的な組織ではないために十分な機能を発揮できないくらいがあった。そこで、EMPCを発展的に解消し、あるエスニック・メディアの発行人であるK氏を中心に2004年に「在日外国人情報センター」を立ち上げ、より多くのエスニック・メディアを糾合して再発足したわけです（最盛時は40社を超えるとされた）。こうした努力の結果、東京都の「地域国際化推進検討委員会」の審議を経て2005年に設置された「都在住外国人向けメディア連絡会」の事務局として活動することになった。同連絡会の大きな目的のひとつは、エスニック・メディアを通して行政からの防災情報な

どを在住外国人に配信することでした。しかし、せっかくの同連絡会も、中心人物であったK氏の死去により、活動は休眠状態に入り、2014年7月現在、連絡も取れない状態です。

外国人メディアの連合体は組織化するのには手間暇かかりますが、役所からの情報、とくに法律の改定や健康、子どもの教育にかんする重要な情報などは連合体が翻訳などをして一元化して流せば情報弱者である外国人はたいへん助かるし、安心できますよね。またメディアの側にとっても受け手の信頼を得られれば固定客も付くので経営的にも安定すると思います。

3. 結論

本稿の目的は、架橋アクターの語りから、かれらの役割や外国人向けメディアのあり方を考察することであった。

すでに、かれらの語りを紹介するなかで随時〈考察〉を行ってきたので、ここではさらに踏み込んだ議論を行いたい。まず、メディアのあり方を検討する。

日本のメディア一般、ブラジル系エスニック・メディアの現状と期待

架橋アクターであるこのミーティングの参加者たちは、エスニック・メディアも主流メディアも基本的には在日外国人の暮らしに役立っているし、指針を与えてくれることもあると捉えている。たとえば、メディアがNPOのイベント開催やバザー用品の募集などを喧伝してくれると一般の反応が全く違ってくる。また、かれらが日本で初めて行ったデモ行進の際も国内外のさまざまなメディアが報じてくれた。せっかくのデモもメディアが報じなければ、広く世に訴えたことにはならない。こうした点は高く評価しているし、感謝しているという。メディアの側

としては、架橋アクターにおもねる必要はないが、公平な多文化共生社会を築くべく奮闘している団体かどうか的確に判断したうえで、是々非々の態度を貫く必要があろう。

他方、批判もある。特に耳が痛いのは独占的な「記者クラブ」制度への批判である。外国人には、既得権益を持つ大メディアだけが優遇され、エスニック・メディアなどのマイノリティ・メディアが疎外されている現状が不思議でならないらしい。これと並んで、役所や企業のプレスリリースを垂れ流しにするという問題も指摘された。記者クラブ制度やそれに準ずる慣習は是正する必要がある。

公平という点では、マイノリティの立場を理解し、熱心に取材するレポーターがいるとする一方で、決まって誤解を生むような書き方をするレポーターもいるという指摘は見逃しにできない。無論、的外れの批判もあるかもしれないが、たびたび指摘を受けるとすればやはりレポーターの姿勢、スタンスにかかわることであると考えたほうがよいだろう。すなわち、だれのためにメディア事業に従事しているか、という志向性の問題である。たとえば弱者に寄り添う「マイノリティ志向」なのか、権力に媚びる「権力志向」なのか、それとも会社における自らの立場を優先する「保身志向」や「出世志向」なのか、はたまた面倒なことはできるだけ避けたいという「事なかれ主義」なのか。そのスタンスはさまざまにあらうが、送り手と接することの多い架橋アクターたちは、敏感に記者たちのスタンスを感じ取っていると思われる。

次に取り上げたいのは犯罪報道における「名指し」の問題である。日本においては、「ブラジル人の女が…」とか、「中国人の男が…」という報道のされかたはごく「普通」のことだが、正直に生きている在日外国人にとっては極めて不適切な形容のしかたであると捉えられている。送り手としては、悪意をもってこうした

形容をしているわけではないとしても、在日外国人のなかにはひどく傷ついている人が少なくないということを念頭においておく必要がある。

日本の組織文化をわきまえない外国人レポーターも問題だが、日本語の能力が十分ではないレポーターに対する不満がたびたび出たのは気になる。30年近く、国内外のエスニック・メディアを見てきた筆者の印象では、洋の東西を問わず、主流言語が十分ではないエスニック・メディアのレポーターや編集者は少なくない。しかし、ブラジル系のメディアに特にその傾向が強いという架橋アクターによる指摘は傾聴に値する。一般に外国語が苦手なブラジル人は多いといわれるが、レポーターも同様であるというわけにはいかない。というのは、エスニック・メディアは他集団や主流社会との交渉・調整という機能（すなわち集団間的機能）と、同胞への確かな情報を提供するという機能（すなわち集団内的機能）を有するが（白水 1996:19-26）、主流言語能力が不足しているようでは、その機能を果たすことは一定程度以上は困難である。できれば、ジャーナリズムの訓練を受けた人材で、なお且つ主流言語（日本であれば日本語）が堪能な人材を登用したい。無論、そうした人材の登用はコストが嵩むのが一般的であるが、できるだけ努力を期待したい。

ジャーナリズムの質はその社会の民度の反映である場合が多い。受け手の多くの厳しい目が送り手の質を高めるといことであろう。架橋アクターの語りのなかにも「ブラジル人は新聞を読まない」とか「活字を読まない」といった指摘があったが、もしその指摘が的を射ているとすれば、メディアの一種であるエスニック・メディアのジャーナリズムとしての質の向上には時間がかかりそうである。

多文化社会における架橋アクターの役割

紙幅の都合で、架橋アクターの語りのすべて収録することができなかったが、かれらは協会や役所、NPOに属しながら同胞集団や他エスニック集団の人びと、さらにはメディアの送り手などと交流・交渉を繰り返している。情報を集めたり、集約したり、適当なかたちに改変したりといった「情報を扱う側面」を持ついっぽう、コンフリクトを抱えている集団や人との間にあるは慰めたり、なだめたりするという「感情を扱う側面」も持つ。さらには異文化交流にかかわる専門家として講師を務めたり、シンポジウムのパネリストになるなど「知識や教養を扱う側面」も持つ。

一般に、仲介者や調停者は、情報の行き来を統御する、いわばゲイトキーパーやリエゾン（連携・連絡係）の役割や、集団間の利害を調節するという役割をもつが、われわれのグループインタビューに参加した架橋アクターはさらに複雑かつ多様な役割を遂行していた。かれらは、連絡将校であり、カウンセラーであり、ケースワーカーであり、時として教育者でもある。このような多岐にわたる側面を持つ（持たざるを得ない）のは、かれらが、まさに多文化社会の最前線で働いているからである。多文化社会では、さまざまな境遇・立場の人がさまざまな要望・要求を突きつける。そうした「なんでもあり」の現場ではバイリンガルであることを含め、多様な人材が求められるのである。しかし、不思議なことに、われわれが接した架橋アクターのほとんどが、その多忙さ、その任務の重さ、そしてその能力の高さにもかかわらず、いわゆる非正規雇用であったり、しっかりとした身分保障を受けない雇用形態であった。その不安定さ、扱われかたの軽さは、工場における在日ブラジル人「派遣切り」と重なって見えてしまう。そこには、日本の政府や自治体の多文化共生社会に対する姿勢・スタンスが如実に表れているの

ではないか思わざるをえない。

石書店

謝辞

本研究は文部科学省科学研究費の助成を受けています。研究代表者：アンジェロ・イシ（武蔵大学教授）基盤研究（B）課題番号：23402045。

イシ教授にはさらに、本稿のもとになったグループインタビューの人選、通訳、そして適切な助言をいただきました。記して感謝します。

参考文献

- 段 躍中（2003）『日本の中国語メディア研究』北溟社
- イシ,アンジェロ（2009a）「在日ブラジル人のメディア界の再編とその問題点」『日本研究』高麗大学校日本研究センター
- イシ,アンジェロ（2009b）「ブラジル移民百周年 - 日系社会、ブラジル社会および在日ブラジル人による記念事業の理念と戦略」『移民研究年報』日本移民学会
- イシ,アンジェロ（2011）「在外ブラジル人ディアスポラとメディア—テレビとそのオーディエンスのトランスナショナルな戦略を中心に」『マス・コミュニケーション研究』日本マス・コミュニケーション学会
- イシ,アンジェロ（2012）「エスニック・メディアの担い手たち—在日ブラジル系メディアビジネスの興亡」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社
- 西野留美子（1999）『エルクラノはなぜ殺されたのか』明石書店
- 白水繁彦（1991）「カナダのエスニック・プレス概観」新保満・田村紀雄・白水繁彦『カナダの日本語新聞』PMC出版
- 白水繁彦（2004）『エスニック・メディア研究』御茶の水書房
- 白水繁彦（2011）「橋を架ける人びと：多文化共生メディアの挑戦」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房
- 白水繁彦編著（1996）『エスニック・メディア』明